

無煙社会を目指して地道に、忍耐強く

科学ジャーナリスト協会理事
牧野賢治

『禁煙ジャーナル』の長年の努力が、医学ジャーナリズムの世界で協会特別賞受賞のかたちで認められた。まずは関係者に「おめでとう」を申し上げる。編集長の献身的な奮闘によるところがすこぶる大きい。それを支えたスタッフや寄稿者の熱意の成果である。また、800人の購読者のサポートも欠かせない。

この「ジャーナル」は、それがスタートする前のいくつかの出版物を含めて、禁煙・嫌煙を進める市民運動の中核的な存在を果たしてきた。腰の重い厚生省（厚労省）の政策を先導し、強力なタバコ産業に立ち向かってきた。そして、喫煙の害に苦しむ人たちの側に立って、貴重な情報を掲載し、運動を推進し、支援してきた。日本のメディア、中でも新聞は、タバコ問題をかなり頻繁に取り上げてきた。しかし、3.11以後は、タバコに関する情報は、スペースの余裕がなくなって大幅に減少した。たとえば、タバコ病被害者の訴訟に関する詳細な情報は新聞、テレビなどのマスメディアではほとんど入手できない。その穴を「禁煙ジャーナル」は十分に埋めている。いまでは「ジャーナル」なしでは、タバコ問題の動向をフォローできなくなっていると言っている。「タバコ問題情報センター」は、その名に恥じない活動をしている、と思う。

私は、編集長の渡辺文学さんとは1978年以来の付き合いだから、かれこれ34年にもなる。その間、文さん（と愛称で呼ぼう）は、脇目を振らずに反タバコ筋、そして喫煙問題と厳しく対峙してきた。その視線は常に、知識人の無責任な喫煙擁護の言論にも向けられ、その根拠が間違っていることをしばしば暴いた。

■タバコ擁護の「文化人」に怒り

名前が売れている知識人が、雑誌などの媒体を利用して、タバコ擁護の言いたい放題をすることには、私も憤りを感じている。専門領域ではそれなりの高い評価を得ている人たちが、なぜ言行のレベルを最低に落としてまでタバコ擁護の論陣をはり、読者を馬鹿にする間違っただ言説を弄するのか。その真意は不明だが、そうした記事の背後にタバコ産業の誘惑の触手が伸びてい

るのではないかと、思わざるを得ない。そして同時に、そうした記事を掲載する雑誌の編集者の墮落を感じる。医学・医療ジャーナリズムとしては、これは看過できない。

■25年前と35年前の出来事

今回の受賞をもたらした日本医学ジャーナリスト協会は25年前に、医学ジャーナリストの有志で立ち上げた組織（当初は医学ジャーナリズム研究会と称した）が成長したものである。私は、その初代の会長を務めた。いちから手作りで創設した頃を懐かしく思い出す。その後、順調に発展して会員は250人を超え、その事業も、会報発行、月例会、シンポジウム開催、医学ジャーナリスト講座などに広がり、今回の協会賞の創設まで達した。その第1回の受賞に「禁煙ジャーナル」が選ばれたのに、ときの流れを痛切に感じる。なぜなら、私が新聞記者だったとき、1977年1月から開始して1年5カ月（68回）続いた『タバコロジー』（連載時のタイトルは「新タバコロジー」だった）連載の時代は、禁煙も嫌煙もまだ世の中にほとんど受け入れられていなかったからである。

■難しい局面の市民運動

欧米諸国の動向を考えれば、日本もやがて変わると信じていたが、日本では政府、行政の取り組みが極めて消極的だったから、市民運動の活発化がぜひとも必要だった。世論が高まれば政府、行政は動かざるを得ない。その意味でも、「禁煙ジャーナル」をはじめとする市民運動サイドからの情報発信は不可欠だったのである。

タバコは合法的な商品であり、喫煙者もゼロにはならないだろう。残念ながら、そういう現実を受け入れるしかない。そのうえで、防煙、嫌煙、禁煙を、どう効果的に進めるか。初期の激動期を無事に乗り越えて、まれにみる成果を上げてきたこの市民運動は今日、ある意味では難しい局面にさしかかっている。さらには、依然としてタバコ販売の世界戦略を進めているタバコ産業側のますます巧妙になる手口にも注意を怠ってはならない。「タバコ問題情報センター」は、私がみるところ、その先見性や行動力ですぐれている。今後とも、信頼できる情報センターとしての役割を期待している。

■仕上げの段階に入ったタバコ問題

ジャーナリストとしての私は、嫌煙権が認知され、禁煙空間が広がったいま、タバ

コ問題は基本的にはほぼ終わった、と思っている。とくにジャーナリズムから見ればそう感じる。しかし、何事も難しいのは仕上げである。たとえば、飲食店の禁煙は緒に就いたばかりで、対応の仕方が難しい。したがって、タバコが存在し、喫煙者がいる限り、タバコ問題は終わらないのである。

タバコ問題では、かつてのような激動期の高揚感はもう来ないだろう。禁煙社会への仕上げには、相当な時間がかかるに違いない。

忍耐のいる市民運動になるだろう。

「禁煙ジャーナル」が今後も、粘り強く、禁煙の仕上げに向かって使命を果たすことを願っている。25年後の日本社会はいろいろな困難に直面するだろうが、タバコ問題はどうなっているだろうか。禁煙社会の成否は後輩に託すしかない。

文さんの父親は新聞記者だった。文さんが市民運動家であると同時にジャーナリストとして、残りの人生を全うしてほしい。

(まきの・けんじ=元毎日新聞編集委員／元東京理科大教授／医学ジャーナリスト協会初代会長)